

十六日

宮沢賢治

青空文庫

よく晴れて前の谷川もいつもとまるでちがつて楽しくごろごろ鳴った。盆の十六日なので鉾山も休んで給料は呉れ畑の仕事も一段落ついて今日こそ一日そこの木やとうもろこしを吹く風も家のなかの煙に射す青い光の棒もみんな二人のものだった。

おみちは朝から畑にあるもので食べられるものを集めていろいろに取り合せてみた。嘉吉は朝いつもの時刻に眼をさましてから寝そべったまま煙草を二、三服ふかしてまたすすう眠ってしまった。

この一年に二日しかない恐らくは太陽からも許されそうな休みの日を外では鳥が針のように啼き日光がしんしんと降った。嘉吉がもうひる近いからと起きたのはもう十一時近くであった。

おみちは餅の三いろ、あんのと枝豆をすつてくるんだのと汁のとを拵えてしまつて膳の支度もして待つていた。嘉吉は楊子をくわいて畦へのみちをよこぎつて川におりて行つた。それは白と鼠いろの縞のある大理石で上流に家のないそのきれいな流れがざあざあ云つたりごぼごぼ湧いたりした。嘉吉はすぐ川下に見える鉾山の方を見た。鉾山も今日はひっそりして鉄索もうごいていず青ぞらにうすくけむつていた。嘉吉はせいせ

いしてそれでもまだどこかに溶けない熱いかたまりがあるように思いながら小屋へ帰つて来た。嘉吉は鉾山の坑木の係りではもう頭株だった。それに前は小林区の現場監督もしていたので木のことではいちばん明るかった。そして冬撰鉾へ来ていたこの村の娘のおみちと出来てからとうとうその一本調子で親たちを納得させておみちを貰つてしまった。親たちは鉾山から少し離れてはいたけれどもじぶんの栗の畑もわずかの山林もくつついていっているいまのところに小屋をたててやった。そしておみちはそのわずかの畑に玉蜀黍や枝豆やささげも植えたけれども大抵は嘉吉を出してやってから実家へ手伝いに行つた。そうしてまだ子供がなく三年経つた。

嘉吉は小屋へ入つた。

(お前さま今夜ほうのきさ仏さん拌みさ行くべ。) おみちが膳の上に豆の餅の皿を置きながら云つた。(うん、うな行つただがら今年あいだないがべが。) 嘉吉が云つた。

(そだら踊りさでも出はるますか。) 俄かにぽつと顔をほてらせながらおみちは云つた。

(ふん見さ行くべさ。) 嘉吉はすこしわらつて云つた。膳ができた。いくつもの峠を越えて海藻の「数文字空白」を着せた馬に運ばれて来たてんぐさも四角に切られて朧ろにひかつた。嘉吉は子供のように箸をとりはじめた。

ふと表の河岸でカーンカーンと岩を叩く音がした。二人はぎよつとして聞き耳をたてた。

音はなくなつた。(今頃探鉢など来るはずあないな。) 嘉吉は豆の餅を口に入れた。音がこちこちまた起つた。

(この餅拵えるのは仙台領ばかりだもな。) 嘉吉はもうそつちを考えるのをやめて話しかけた。(はあ。) おみちはけれども氣の無さそうに返事してまだおもての音を気にしていた。

(今日日はちよつとお訪ねいたしますが。) 門口で若い水々しい声が云つた。(はあい。) 嘉吉は用があつたからこつちへ廻れといった風で口をもぐもぐしながら云つた。けれどもその眼はじつとおみちを見ていた。

(あつ、こつちですか。今日は。ご飯中をどうも失敬しました。ちよつとお尋ねしますが、この上流に水車がありますようか。) 若いかばんを持って鉄槌をさげた学生だつた。(さあ、お前さんどこから来なすつた。) 嘉吉は少しむかっぱらをたてたように云つた。

(仙台の大学のもんですがね。地図にはこの家がなく水車があるんです。)(ははあ。)

嘉吉は馬鹿にしたように云った。青年はすっかり照れてしまった。

（まあ地図をお見せなさい。お掛けなさい。）嘉吉は自分も前小林区に居たので地図は明るかった。学生は地図を渡しながら云われた通りしきいに腰掛けてしまった。おみちはすぐ台所の方へ立つて行って手早く餅や海藻とささげを煮た膳をこしらえて来て、

（おあがんなんえ）と云った。

（こいつあ水車じやありませんや。前じきそこにあつたんですが掛手金山の精錬所です。）（ああ、金鉢を搗くあいつですね。）（ええ、そう、そう、水車つて云えば水車でさあ。ただ粟や稗を搗くんでない金を搗くだけで。）（そしてお家はまだ建たなかつたんですね、いやお食事のところをお邪魔しました。ありがとうございます。）

学生は立とうとした。嘉吉はおみちの前でもう少してきばき話をつづけたかつたし、学生がすこしもこつちを悪く受けないのが気に入ってあわてて云った。（まあ、ひとつおつき合いなさい。ここらは今日盆の十六日でこうして遊んでいるんです。かかあもせつ角掬えたのお客さんに食べていたただかないと恥かきますから。）（おあがんなんえ。）おみちも低く云った。

学生はしばらく立っていたが決心したように腰をおろした。（そいじや頂きますよ。）

(はつは、なあに、ここらのご馳走でばこつたなもんで。そうするどあなだは大学では何のほうで。)(地質です。もうからない仕事で。)(餅を噛み切つて呑み下してまた云つた。)(化石をさがしに来たんです。)(化石も嘉吉は知つていた。)(その岩にありしたか。)(ええ海百合です。外でもとりました。この岩はまだ上流にも二、三ヶ所出ていましよ。)(はあはあ、出てます出てます。)(学生は何でももう早く餅をげろ呑みにして早く生きたいようにも見えまたやつぱり疲れてもいればこういう款待に温さを感じてまだ止まつていたいようにも見えた。)

(今日はそうせぼとどこまで。)(ええ、峠まで行つて引返して来て県道をお船渡へ出ようと思ひます。)

(今晚のお泊りは。)(姥石まで行けましようか。)(はあ、ゆつくりでごあんす。)(いや、どうも失礼しました。ほんとうにいろいろご馳走になって、これはほんの少しですが。)(学生は鞆から敷島を一つとキヤラメルはこの小さな箱を出して置いた。)(なあにす、そたなごとお前さん。)(おみちは顔を赤くしてそれを押し戻した。)

(もうほんの。)(学生はさつさと出て行つた。)(なあんだ。あと姥石まで煙草売るどこないも。ぼかげで置いて来。)(おみちは急いで草履をつつかけて出たけれども間もなく戻つ

て来た。(脚早くて。とつても。)(若いから律儀だもな。)(嘉吉はまたゆくりくつろいでうすぐろいてんを砕いて醬油につけて食った。

おみちは娘のような顔いろでまだぼんやりしたように座っていた。それは嘉吉がおみちを知つてからわずかに二度だけ見た表情であった。

(おらにもああいう若いづぎあつたんだがな、ああいう面白い目見る暇ないがったもな。)(嘉吉が云つた。

(あん。)(おみちはまだぼんやりして何か考えていた。

嘉吉はかつとなつた。

(じやい、はきはきど返事せじや。何であ、あたな人形こき奴さあすぐにほれやがて。)

(何云うべこの人あ。)(おみちはさあつと青じろくなつてまた赤くなつた。

(ええ糞そのつら付。見だぐない。どこさでもけづがれ。びつき。)(嘉吉はまるで落ちはじめたなだれのように膳を向うへけ飛ばした。おみちはとうとうつぶせになつて声をあげて泣き出した。

(何だい。あつたな雨降れば無くなるような奴。尻こき、食えの申し訳げないの機嫌取りやがて。)(嘉吉はまたそう云つたけれどもすこしもそれに逆うでもなくただ辛そうにし

くしく泣いているおみちのよごれた小倉こくらの黒いえりや顫ふるうせなかを見てると二人とも何年ぶりかのただの子供こどもになってこの一日をままごとのようにして遊あそんでいたのをめちやめちやにこわしてしまったようだからだが風と青い寒かんてん天でごちやごちやにされたような情なさけない気がした。

（おみち何であその年してでわらすみだいに。起おぎろつたら。起おぎで片付かたづげろつたら。）
おみちは泣なきじやくりながら起きあがった。そしてじぶんはまだろくに食べもしなかつた膳ぜんを片付けはじめた。

嘉吉かきちはマツチをすつてたばこを二つ三つのんだ。それから横よこからじつとおみちを見るとまだ泣きたいのを無理むりにこらえて口をびくびくしながらぼんやり眼めを赤くしているのが酔よつた狸たぬきのようにでも見えた。嘉吉は矢もたてもたまらず俄にわかにおみちが可哀かわいそうになつてきた。

嘉吉はじつと考えた。おみちがさつきあの顔いろはこつちの邪推じゃすいかもしれない。

及およびもしないあんな男をいきなり一言二言ひとことはなしてそんなことを考えるなんてあることでない。そうだとするとおれがあんな大学生とでも引け目なしにぱりぱり談はなした。そのおれの力を感じかんじていたのかも知れない。それにおれには鉋夫こうぶどもにさえ馬鹿ばかにはされな

肩かたうでや腕うでの力がある。あんなひよろひよろした若造わかぞうにくらべては何と云いつてもおみちにはおれのほうが勝ち目めがある。

(おみち、ちよつとこさ来こ)。嘉吉かきちが云いつた。

おみちはだまつて来て首くびを垂たれて座すわつた。

(うなまるで 冗談じょうだん 談だん づごと判わがらないで 面白おもしろくないもな。盆ぼんの十六日いそあ遊あそばないばつまらない。おれ云いつたなみんなうそさ。な。それでもああいうきれいな男おとこうなだて好すぎだべ。
)(好あまかない。) おみちが甘あまえるように云いつた。

(好あまぎたつて云いつたらおれごしやぐど思うが。そのこらいなごと云いつてごしやぐような水み臭ずくさいおらだないな。誰だれだつてきれいなものすぎさな。おれだつて伊手いででもいいあねこ見みればその話わだてするさ。あのあんこだて好すぎだべ。好すぎだて云いえ。こう云いうごとほんと云いうこそ実じつあるづもんだ。な。好すぎだべ。) おみちは子供こどものようになずいた。嘉吉かきちはまだくしやくしや泣ないておどけたような顔かほをしたおみちを抱だいてこつそり耳みみへささやいた。
(そだがらさ、あのあんこ肴さかなにして今日けふあ遊あそぶべじやい。いいが。おれあのあんこようなさ取とり持もつ。大丈だいじょうぶ夫ぶだだよ。おれこれから出掛でかけて峠とうげさ行いくまでに行いきあつて今夜おとの踊おどり見るべしてすすめるがらよ、なあにどごまで行いかないやないようだないがけな。そして

踊り済すまつてがら家しつかさ連れで来ておれ実家じつかさ行とつて泊とまつて来るがらうなこつちで泣たいて頼たのんでみなよ。おれの妹いもうとだつて云いえばいいがらよ。そしてさ出来できればよ、うなも町まちさ出ではてもうんといいい女子こだづごともわがら。

おみちの胸むねはこの悪魔あくまのささやきにどかどか鳴なつた。それからいきなり嘉吉かきちをとび退ひいて、

(何云なにうべ、この人ひとあ、人ひとばがにして。)そして爽さわかに笑わらつた。嘉吉かきちもごろりと寝ねそべつて天てん井じょうを見みながら何なにべんも笑わらつた。そこでおみちははじめて晴はれ晴はれじぶんの拵こしらえた寒かん天てんもたべた。餅もちもたべた。キャラメルキャラメルの箱はこと敷しき島しまは秋あきらしい日光にっかのなかにしずかに横よこわつた。

青空文庫情報

底本：「ポラーノの広場」角川文庫、角川書店

1996（平成8）年6月25日初版発行

底本の親本：「新校本 宮澤賢治全集」筑摩書房

1995（平成7）年5月

入力：ゆうき

校正：noriko saito

2009年8月15日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

十六日

宮沢賢治

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>